

Ⅲ. 各学年の授業実践

特別支援学級

すくすくⅠ(知的障害特別支援学級 4年男子1名 1年男子1名在籍)

1) 第1学年 国語科 すごいぞ!じどう車ずかんをつくろう

「じどう車くらべ」

「読むこと」と「書くこと」の複合単元であり、事柄の順序などを考えながら内容の大体を捉えて読み、自分の思いや考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成で文を書くことがねらいである。文のまとまりごとに色分けし、読んだり書いたりすることで、文の構成を捉えやすくした。

成果

- 「じどう車ずかんをつくるために」というゴール意識をはっきりさせることで、読んだり書いたりする意欲へとつなげることができた。
- 「しごと」や「つくり」について、絵と文を対応させながら読んだり、動作化したりすることで言葉の意味の理解につなげることができた。
- 文のまとまりごとに色分けすることで、「しごと」と「つくり」の構成を視覚的にも理解させ、事柄の順序に沿った構成を考えさせることができた。また、絵と文を対応させながら読むことで、“そのために”という言葉の意味を正確に捉え、文章を書くときに自分でふり返る手立てとなった。



課題

- 図鑑づくりでは、教えることが多すぎたことで児童の主体性が損なわれてしまった。自分で取り組ませることと支援することを明確にしておき、支援しつつ本人の達成感も得られるような指導の工夫をしていく必要がある。
- ふり返りをする時間の確保が課題である。自分の学びをふり返る時間が設定できるようにタイムマネジメントし、深い学びへとつなげていけるようにする。
- 語彙をさらに増やすことができるように、授業の中で学習用語を意識的に使ったり、国語科教科書付録「言葉のたから箱」を活用したり、自立活動等の時間を使ったりして、表現を広げていけるように意図的にしかけていく。

2) 第4学年 道徳科 ほんとうの親切(親切、思いやり)「心と心のあくしゅ」

見守ることも親切の一つであることに気づき、思いやりの心を持って親切にしようとする心情を育てる。教材を通して、相手の気持ちになって、その人のためになるかをよく考えることが大切であることを押さえた後、困っている人や下級生など教材とは別の具体的な場面を設定し親切について考えさせることで、より普段の生活と結び付けて考えた。

成果

- 考えがでなかったときには、「先生だったら」「自分だったら」等、様々なアプローチで問い返していくことで、児童の言葉で気づかせることができた。
- 教材とは別の具体的な場面を設定することで、自分の生活に結びつけて考えることができた。また、相手の気持ちになって、その人のためになるかをよく考えることが大切であることにも、結びつけることができた。
- 構造的な板書を意識することで、これからやってみたいことや大切にしたいことをふり返ることができた。

課題

- 授業の終末では、教師主導でまとめてしまうことがあった。ふり返りでは「今日大事なことはなに？」と問うことで、子どもの言葉をできるだけ使ってまとめられるように工夫する必要がある。
- 多面的・多角的に考えられる手立てとして、教師が揺さぶる質問をする、パペットを使って話す、別の人のエピソードを話す等、授業展開を工夫していく。

特別支援学級

すくすく2(自閉・情緒障害特別支援学級 2年男子1名 3年男子1名在籍)

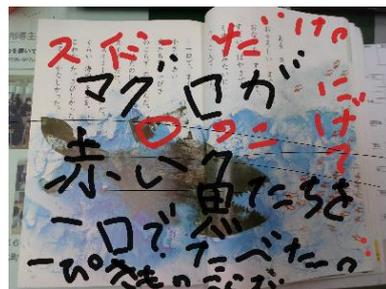
1) 第2学年 国語科 お話を読んで、しょうかいしよう

「スイミー」

本単元は、様子がわかることばを見つけ、登場人物の行動を具体的に想像し、お話のあらすじをまとめ、お話を紹介する学習である。場面ごとにクロームブックの描画キャンパスの本文を読み、登場人物の行動を想像し、どんなできごとがおこったのか、「スイミー」は何をしたのかを簡単な文で表した。その表した文をふり返り、お話のあらすじをつかめるようにした。

成果

- 『あらすじ』という用語に戸惑いを見せ、当初教科書を開くのを嫌がった児童が、タブレットで写真を取り、描画キャンパスで視覚化したことで、自分が操作する楽しさから、興味をもって読む活動ができた。
- 場面ごとに、お話文を読み、具体的に想像し、できごとやスイミーのしたことを主語＋述語の簡単な文で表し、手書きで書き入れることで意欲的に取り組むことができた。
- 場面ごとに表した文を振り返ることで、『あらすじ』を理解し、お話紹介に『あらすじ』を入れることができた。



課題

- 場面ごとに取り組むと断片的な捉えになりやすい。前時のふり返りをしたり、お話の全体に目を向けさせたりして、児童がお話の展開を意識できるようにしていく。
- 1学期のお話を読む段階では、描画キャンパスは効果的だった。さらに、お話の展開や様子を表す言葉を残しておけるものを利用していく。

第1学年

1) 国語科 くわしくかこう

「しらせたいな、見せたいな」

必要な事柄を集めたり、確かめたりして、書き表す単元である。題材の設定から、取材メモ、記述、推敲、交流という一連の流れを初めて経験する。ここでは、「たからものしょうかい」という言語活動を設定し、友だちに伝えたい、という意欲を喚起した。また、取材メモから一文ずつ「文カード」におこし、文の順番を組み立てて書く手立てをとった。

成果

- 具体物を見ながら、取材メモをくわしく書けた。
- 記述のスマールステップで、抵抗なく原稿用紙に向き合うことができた。
- 「たからものしょうかい」では、実物を見せながら、原稿を読み上げた。楽しく聞き合う姿や、発表できてよかったという姿が見られた。

課題

- 推敲を重ねたが、まだ発達段階的に難しい。句読点や、助詞の使い方・位置が曖昧であった。
- 書く力に個人差が大きく、一人一人に適時支援することが難しい。
- 自己評価をさせられなかった。めあての観点に沿って、評価できるとよい。



第2学年

1) 国語科 がまくんとかえるくんシリーズの「すてき」を見つけて、しょうかいしよう 「お手紙」

本単元では、吹き出し等を使って、登場人物の行動を具体的に想像することを学んだ。がまくんとかえるくんシリーズの話を具体的に想像しながら読み、すてきだと思ったところとそのわけを「すてきブック」にまとめて、川北小及び中島小の2年生と交流した。

成果

- 児童一人一人に My 吹き出しを配布し、教科書の挿し絵に当てながら考えることで、登場人物の様子や気持ちを具体的に想像することができた。
- それぞれの登場人物になって演技する活動を取り入れることで、学習への意欲が高まった。
- 他の小学校と交流することをゴールに設定することで、相手意識を持ち、意欲的に「すてきブック」にまとめている。
- 登場人物と自分を比べながら書いたり、シリーズ本を進んで読んだり、深まりや広がりが見られた。



課題

- 想像が膨らみすぎて、叙述に立ち戻って考えることが十分でなかった。教科書の本文を黒板等に掲示し、児童と確認しながら、叙述をもとに考えるようにしていく。
- すてきと思ったわけが、「やさしいから」が多かった。語彙が少ないと感じた。そのため、「やさしい」の類義語を考えさせウエビングマップでまとめたり、類語辞典で調べたりすることで、語彙を豊かにし、より自分の考えに近い言葉を選べるようにしていきたい。

2) 音楽科 リズムをかさねて楽しもう

2拍子と3拍子との感じの違いを思い出し、拍にのってリズム唱したり、手拍子や打楽器でリズムを打ったりする。リズムを重ねて演奏する学習を進めながら、リズム伴奏に重ねて歌う楽しさを味わい、2拍子や3拍子の音楽がもつよさや面白さを感じていく。リズム伴奏を友達と分担して演奏したり、それに合わせて歌ったりする協働的な学習を通して、拍子やリズムに対する感覚を高めるようにしていった。

成果

- はじめは、4分音符と4分休符だけのリズムでもつまづいている子がいたが、音符や休符の長さを視覚的に表したり、繰り返し練習したりすることで、拍にのってリズム打ちができるようになった。
- 4分音符と4分休符だけのリズム打ちをできる技能が身についたことで、8分音符や8分休符が入った細かいリズムもリズム打ちできるようになった。
- 足踏みを用いて、強拍となる下の段を足踏みで、弱拍になる上の段を手拍子で打つことで、2拍子を感じ取りやすくなった。



課題

- ペアで分担奏をしたが、片方の旋律しかリズム打ちをすることができなかつたため、旋律だけ交代するなどして、両方のリズム打ちをすることができるようにする。
- 課題とまとめが対応していなかつたため、指導事項に沿ったまとめになるように課題を設定していきたい。
- 本時の目標が、知識か技能か区別できていなかつたので、目標をどちらかに絞って明確にする。

第3学年

1) 国語科 おすすめはここだ!ナンバーワンPOP決定戦 「三年とうげ」

本のポップ作りを通して、民話や昔話に多く当てはまる話の組み立てに着目し、捉えるとともに、場面の移り変わりや結び付けて、登場人物の心情の変化を捉える力を付けることをねらいとした。教師がモデルとなるポップを提示し、完成したポップを図書室に飾るという単元のゴールを全体で共有し、児童の意欲付けを図り、単元のイメージを持たせた。また、「三年とうげ」を通して一度ポップを作る練習をすることで、並行読書で選んだ本のポップ作りに、抵抗なく移行できるようにした。

成果

- 学習の初めに、児童と「単元のゴール」と「つきたい力」の共有を行うことで、児童は見通しを持って、意欲的に学習に取り組んでいた。
- ゴールに向かうためのワークシートを用いることで、児童のねらい達成に近づくことができた。
- ふり返りの視点を明確にすることで、学びの自覚化へと繋がった。



課題

- 児童の困り感からペアでの話し合いを取り入れた際は、意図的に設けた話し合いの場面と比べると、ペアワークの効果が薄かった。
- 登場人物の変化を捉える際、深まりがあまり見られなかった。ねらいに迫るために、どこでどんな活動や問い返しが有効なのか、45分間の授業の流れを緻密に考えていかなければならない。また、子どもの実態に合わせて、授業をコーディネートしていく力の必要性も感じた。

2) 算数科 あまりのあるわり算

余りのあるわり算について、余りの意味やその計算の仕方を理解し、わる数と余りの大きさの関係を捉えたり、場面に応じて余りを処理したりできるようにするとともに、生活や学習に活用することがねらいである。特に、図や具体物を用いて、余りの意味理解が正しくできるような算数的活動を大切にしている。

成果

- 何を持って根拠とするかを問い返すことで、ねらいに迫ることができた。
- 児童の困り感に合わせてペアワークを取り入れることで、解決の手助けとなり、意味のある学習形態の工夫となった。

課題

- 子どもの思考を評価する場合は、どのような図をかくか、どのように図や具体物を使って問題解決に向かうか、教師が手がかりを与えずに見守る時間が必要である。
- 学びの自覚化を図るため、ふり返りの視点は、自分についた力（自覚化）とこれから学びたいこと（主体性）に絞るべきだった。



第4学年

1) 国語科 心が動いた!「グッとくる」見どころを紹介しよう 「ごんぎつね」

本単元は、登場人物の気持ちの変化や性格について、場面の移り変わり結びつけて具体的に想像することが指導のねらいである。指導のねらいを達成するために、主人公の気持ちの変化を捉えていき、物語の中で一番「グッとくる」見どころを紹介するリーフレット作りを言語活動として行った。リーフレットは、「物語のあらすじ」「グッとくる見どころ」「感想」の3つの構成で作成した。「グッとくる見どころ」は、それぞれの児童がグッとくる見どころを友達と交流した後に書く活動を行った。



成果

- ねらい達成のためにはどのように単元を進めるのかを考え、事前に教師がモデルを作成し提示した。単元のゴールから逆算して考えることで、学習の進め方や手立てを計画することができた。
- 学習計画を児童と共有することで、児童が単元全体を通しての見通しを持つことができ、本時では何をすべきかという視点を持って学習に臨むことができた。
- 黒板に掲示する拡大全文シートと、児童用の全文シートを同じものにするすることで、考えの共有をすることにつながった。全文シートを使うことで、場面の移り変わり結びつけて登場人物の気持ちの変化を捉えることができた。

課題

- 教師が事前に想定したリーフレットの内容が多かった。ねらい達成のためには何が必要なのか、児童の実態を基に内容をもっと精選し、絞り込んでおく必要があった。
- 児童はそれぞれに叙述と関連させて登場人物の気持ちを想像することができていた。子ども同士の考えをつなぎ、全体で共有するための発問の内容や仕方に工夫が必要だった。

2) 国語科(書写)「画の方向」に気をつけて、形を整えて書こう

本単元は、二つ並んだ左払いの画の方向の違いについて学習し、形を整えて書くことが指導のねらいである。「夕」や「冬」のような「上下に並ぶ左払い」は、下の左払いを長くし、間が広がるように書く。「夏」や「友」のような「左右に並ぶ左払い」は、「間が狭くなるように書く」「同じ左払いでも画の方向に大きな違いがある」という文字の整え方のきまりを子ども達が気づき、文字の整え方のきまりを使って積極的かつ粘り強く書くことができるように学習を行った。



成果

- 文字の整え方のきまりを獲得する場面では、左払いが欠けている不完全な文字が書かれたワークシートを使用することで、画の方向をどのようにすると字形が整うのかを考えることができた。その後全体交流を行うことで、多くの児童が正しい画の方向を理解し、文字の整え方のきまりを獲得することができた。
- ゲストティーチャーとして山本真弓先生をお招きし、筆の動かし方や穂先の動き等について指導していただくことで、児童は意欲的に何度も練習を重ねることができた。

課題

- 書写の指導では、文字を整えるためのルールを児童に習得させていくという意図を持ち、教師自身が文字の整え方のきまりを理解し、ねらい達成に向け、指導していく必要がある。
- 学習のふり返りは視点を示すことなく行ったので、様々な内容のふり返りが児童から出てきた。学びの自覚化を促すためにも、具体的な視点を示すべきであった。学びの蓄積を残すために、ふり返りを話すだけでなく書かせるなどして記録に残していく。

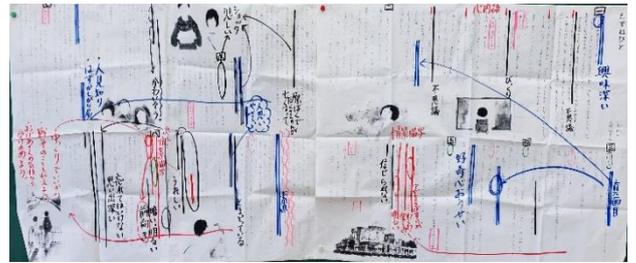
第5学年

1) 国語科 み力が伝わるように「たずねびとすいせんカード」を書いて、四年生にすいせんしよう 「たずねびと」

「物語を読み、その魅力を4年生に推薦しよう」という言語活動を設定した。人物像や物語の全体像を具体的に想像し、表現の効果を考えることができることと、物語を読んで、自分の考えをまとめることができることが本単元のねらいである。その力をつけるために、児童と4つの「み力の視点」を共有し、物語を読み進めた。また、たくさんの魅力の中から伝えたい一番のみ力をまとめる活動を行った。

成果

- 「4年生に魅力を伝える」という相手意識・目的意識を毎時間共有したことにより、児童は意欲的に学習に参加することができた。
- 普段の授業から「友達の考えを聞きたい」「一緒に考えたい」という目的意識を持たせて交流することを大切にしてきたことで、交流に対して意欲的な姿が見られた。また、「どうして」「どこから」等の理由や根拠を問う言葉を視覚的に板書したことにより、児童はそれを用いて友達の意見に反応したりつなげたりしながら交流することができた。
- 全文シートを用いて学習を進めたことにより、どの叙述から人物像や心情の変化を想像したのか簡潔にまとめることができた。また、友達のよい考えも書き込むことができた。板書にも拡大全文シートを用いたことにより、叙述のつながりや場面ごとの心情の変化を児童と共有しながら学習を展開することができた。



課題

- 話し合いに時間がかかり、まとめやふり返りの時間を確保できなかった。話し合いの内容を焦点化するとよかった。心情の変化を読み取る時間では、1つ1つの叙述を確認するのではなく、全体でどのように変化したのかを話し合わせるなど、話し合いの中心を吟味する必要がある。
- 話し合いのスキルに個人差がある。そのため、グループによっては考えを深めるところまで至っていなかった。普段の授業の中でも話型を提示しながら考えを深めるための話し合いを展開できるようにしていきたい。

2) 外国語科 Unit5 Where is the post office?

「自分の作ったオリジナルタウンの地図を使って、道案内をしよう」という言語活動を設定した。自分の知りたい場所や位置をたずねたり、相手を案内したりするために、場所や位置のたずね方や答え方などについて、伝え合うことが本単元のねらいである。そのために、様々な地図を用いたり、教室を地図に見立てた場を設定したりして、役割を変えながら繰り返し道案内のやりとりをする活動を行った。

成果

- 1時間の中で書く、聞く、話す活動があったが、活動に見通しを持たせることで、メリハリをつけて取り組むことができ、児童が意欲的に活動に参加することができた。
- デジタル教科書や地図記号カードなど、視覚支援を充実させたことにより、児童は音と絵を結びつけて外国語を理解することができた。
- 場の設定やペアを何度も変えて繰り返し話す活動を取り入れたことで、道案内のやり取りに慣れることができた。単元末では、多くの児童がすらすらとたずねたり答えたりすることができた。



課題

- 「たちばなシアター」は外国語活動では主流だが、外国語科では児童を巻き込んだ small talk ができるとよかった。外国語科の授業では、教師がなるべく本物のやり取りをして、身近な話題などから児童にも話を広げていけるようにする。
- 児童のグッドモデルを取り上げるなど、中間指導を行うことでさらに話す力を向上させていく。

第6学年

1) 国語科 たちばなっ子 チャレンジ提案文 ～盛り上げたるげん～

「私たちにできること」

本単元では、筋道の通った文章となるように、文章全体の構成や展開を考えて書くことが指導のねらいである。身の回りにおける問題について自分達でできることを考え、そのことを実現するために提案する文章を書くことを言語活動とした。学校生活の中で見つけた問題点について、具体的な事実や考えをもとにグループで話し合い、読み手に納得してもらえそうな文章を書く活動を行った。



成果

- 言語活動を設定する際に、「自分達の学校を盛り上げたい」という思いを持たせることで、書く意欲につながった。普段あまり考えが浮かばない児童も自分達の学校における問題ということで、積極的に意見を述べたり、読み手を納得させるにはどうしたら良いのかを考えたりしていた。
- 3人グループでクロームブックを使って共同編集することで、書き方や考えに困った時には自然に話し合ったり助け合ったりしていた。
- モデル文を示し、書き表し方について学習したことで見通しを持って書くことができた。提案文での文章の構成や相手が納得できる言葉を考えることの大切さを理解し、目的に応じた文章となるように事実と感想、意見とを区別して書き、文章全体を構成することができた。

課題

- クロームブックのドキュメントで文章を作成したが、グループでの共同編集となるため個々の評価が難しくなった。ドキュメントでの共同編集は効果的だったが、単元の途中で児童がどのように思考しているのかを見取るには工夫する必要がある。
- 考えを深めるためには、効果的な話し合いが必要であった。自分の考えを伝えるだけでなく、どうすれば読み手を納得できるかという視点で話し合うための土台作りが必要だと感じた。

2) 体育科 STEP UP して世界を越える! ～仲間3人の力を合わせて～(走り幅跳び)

本単元では、ルールを決めて競争したり、自己の記録の伸びや目標とする記録の達成を目指したりすることができるように、走り幅跳びに取り組んだ。陸上運動では個人での競争が多くなるため、苦手な児童にとっては積極的に運動に取り組めないことが考えられた。そこで、3人の記録を足して世界記録の8m95cmを越えるというゴールを設定し、それを達成するために、仲間と関わり合いながら練習することをねらいとした。



成果

- 場や教具の工夫によって、どの児童も積極的に運動に取り組んでいた。セーフティーマットに向かって跳ぶことで安心して思い切り跳んだり、色メジャーを使って目標地点を可視化したりしたことが積極的に運動することへとつながった。
- 自己の記録や世界記録を越えるために、お互いに視点を持って見合いアドバイスしていた。目的を持って教具を使うことで、動きの向上を図ったり、視点に沿ったアドバイスを伝えたりすることができた。
- 毎時間ふり返りを書くことで、それぞれの児童の達成感や考えを知ることができた。

課題

- 毎時間ねらいを持って指導に当たったが、教具の使い方や運動の行い方が浸透しない時もあった。ねらいに沿った場や発問を考えておく必要がある。
- 指導要領解説を読んでも、解釈が難しく指導に落とすことができないことがあった。先輩教員に聞いたり、調べたりする必要がある。

第5学年

1) 家庭科 物を生かして住みやすく

住まいの整理・整とんの仕方、環境に配慮した生活における物の使い方などについて問題を見いだして課題を設定することをねらいとした。部屋が散らかっている写真を見せることで、どんなことに困るのか・どうすれば気持ちのよい場所になるかを考えさせた。そして、家族みんなが気持ちのよい場所にするためには、整理・整とんやそうじをする必要があることを知り、その仕方を学ぶことを単元の学習課題として設定した。

成果

- 導入で部屋が散らかった写真を見せ、デジタル教科書を使って拡大して見たりしたことが効果的であった。そこから困ることや改善策を児童が一生懸命思考することができていた。
- 家庭科に必要な見方・考え方として、健康・快適・安全の視点でまとめていたので、単元の学習課題につなげることができていた。
- 身近なところから課題を作ることができ、ふり返りでは自分の生活とつなげて考えることができていた。



課題

- 授業の最後に、課題をより具体化するために「整理・整とんマスターになって学校をきれいにする」などのゴールの姿を全体で確認する必要がある。
- 困ったことを出させた後に自分の生活の問題点を考えさせると、課題がより身近なものになり、主体的に学習を進めようとする意欲につながったと思われる。
- 家庭科の見方・考え方をさらに働かせるために、もっと自由に意見を出させ、カテゴリーに分けるとよかった。